時流を読む

都市に協同の大地を求めて

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

労働者協同組合法が成立

労働者協同組合をご存知だろうか。通称はワーカーズコープ（以下「ワーカーズ」）。労働者の権利を守るための労働組合とは別物で、労働者による協同組合である。協同組合法制は業種別となっていることから、これまで協同組合としての法的位置づけは得られずにきたが、一昨年12月に労働者協同組合法が成立。本年10月1日での施行が予定されている。ワーカーズは、既存の協同組合とは異なり、3人以上で構成され、組合員は出資をして労働するにとどまらず、経営への意思反映をも行う。すなわち組合員は出資者・労働者・経営者の三位一体的存在となる。

ワーカーズは戦後の失業者対策事業を発端とし、清掃・施設管理、学童・保育、福祉・介護等と事業を拡げ、直近では組合員数15千人、事業量は350億円に及ぶ。

武蔵野新田開発と川崎平右衛門

話は大きく飛ぶが、2014年から3年にわたり、東京都小金井市にあるNPO現代座で、代表の木村快氏の脚本・演出による合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」が上演された。

江戸時代中期、八代将軍吉宗の命によって、大岡越前守忠相を責任者に武蔵野の新田開発が行われた。年月が流れ人を変えてもうまく行かなかった新田開発を成功に導いたのが現府中市となる押立村の名主・川崎平右衛門であった。平右衛門は侍たちとは違って、百姓たちの持つ力を引き出し、これを協同の力として発揮させたところに成功のカギはあった。

本公演に多くの人が心打たれ、見て終わりではもったいない。平右衛門を多くの人に知らせるべく活動展開しようということで有志が集まり、17年に川崎平右衛門顕彰会・研究会が発足した。これを機に毎年、新田開発が行われたゆかりの地をめぐりながら研究会を重ねてきた。そしてこの研究会の企画・開催にあたる実行委員会に、ワーカーズの人たちがボランティで参画し支えてきた。

「都市農業研究会」を立ち上げ

昨年11月、小平市で開催された研究会は第5回目となるが、この研究会を機に、武蔵野台地の都市農地を保全して土とみどりを維持し、市民・労働者の農業への参画をも含めた都市農業の活性化に取り組んでいくことを目指して、先の2月3日に「都市農業研究会」が発足した。事務局はワーカーズを主体に、顕彰会・研究会が協力する形で構成された。

都市農業研究会は戦略の協議・決定の場となるが、決定した戦略をもとに、市民・消費者を協同化し、JAや生協と連携しながら、体験農園とワークショップ講座を積み重ね、修了者を中心に協同農園を運営。そこから援農者や新規就農者も生み出していくべく、ステップを刻みながら前進を期す。

市民皆農をつうじて都市農業の多様な機能を発揮させ、人・環境・自然にやさしい農的社会への変革を目指す。夢は大きく、協同の力による都市農業振興への挑戦を開始する。